百草露

七

太政官文庫
和書
門
一一六八五
一九七
一〇三
冊 架 函 號

内閣文庫
和書
類 號 冊 函 架
一一六八五
一〇
二二二
二四

内閣文庫
番號 和 11685
冊數 10 (7)
函號 212 306

国立公文書館
National Archives of Japan

百草露

大日本史曰（后妃傳）國朝後宮設員次不一曰妃曰嬪曰尚侍曰典侍曰掌侍皆令之所載也曰女御曰御息所曰更衣曰御匣殿皆後世所置而女御最貴寵之所在。婦人五等后夫人孺子婦人妻又王后六宮前一宮後宮五所謂五者后宮三人夫人九嬪二十七世婦宮八十一御妾宮凡一百三十人　皇后女君　命婦得選刀自采女女官東豎子

上古より女帝十一代あり十五代神功后皇三十四代推古天皇三十六代皇極天皇三十八代齊明天皇（皇極再祚）四十一代持統天皇四十三代元明天皇四十四代元正天皇四十六代

孝謙天皇四十八代称徳天皇（孝謙再祚）百十一代明正院百十八代後櫻町院也

西土　女御有八十一之女御從是王代相續后妃為女御

本朝二十二代大泊瀬幼武天皇雄略帝也后妃吉備上道女始為女御自夫世代奉號女御

上畧　堯嬪二女於舜之礼校視之百世不取同姓之禮則短於此而長於彼本之殷周之諸侯皆攀堯礼以取姊妹而共為夫人者多堯聞之雖無妬以非同姓亦可謂之失人道也雖紅毛諸尼利亞国未嘗聞有此禮也

御臺盤所（摂政関白ハ御室ヲいふ）　大政所　御臺所（御臺ともいふ）　簾中

北方　内室　奥方　李妻　妾　後妻（後添ともいふ）　後室

（後家ともいふ）　嫡妻　後女（古事記白椿改宇波那理）　嫌（新撰字鏡宇波奈利）　大和物

諸卷下　又檜垣嫗集ゆうはのかきのうばしゅうと云ふ支見四ツ十ミ

ミ前妻　云々古言ヒウハナリと云ふ古言ヒウハナリと云ふ後妻を云ふ古言ヒウハナリと云ふ

姫婦　云妻（左氏傳昭公二十二年条曰有仍氏女有美色書曰鉛賣也鉛衍同）

嫉妬　二字をウハナリヲタミと訓（日本書紀二十三）

手弱女　艶女　息女　處女　娘　嬢　小姐　嫉（兩雅曰女曰嬢）

新造　寡婦　孀婦（とも云）　召仕　御部屋　内證　隱女　恍惚子

外婦　思物　侍女　腰元　傍女　婢女　下女　中居

端女　女曹　賤女　六平（本邦俗謂醜女）　三満（為乙御前）　女女　乙女

神子　巫女　諜賤女　手兒名　哲婦　傾城

傾國　前漢外傳曰李延年妹絶美侍上酒酣歌曰北方有佳人絶世獨立一顧傾人城再顧傾人國佳人難再得聞之乃召入宮李夫人是也傾國傾城之名始于此　遊女　娼婦　賣

女　賣色　戯女　女郎　一夜妻　浮身　憂身　川竹

遊女　流身　南有喬木不可休息漢有遊女不可求思　詩経　漢廣

章　厨子君　辻君　ソウカホ　ヨタカ　江戸　湯女　小女郎　子

嚬元　傀儡　舞子　白拍子　女太夫　女藝者　娼家

女肆　書屋　亡八　色町　花街　揚屋　京　オキセン

張　シヤミセン　江戸　オツコチ　市女　市子物売女

市姫神　市戎守り　ゑびす神

名ふ色てゝ　ゆゑるたゝりたゞ女郎花我ゆゑよりて人小詩ゝる

或の戯哥ふ　下ゝら上へ落ゝ云ゝ

賤ゝ女ゝ殿上人ふくとゝれゝく下ゝら上へゝゝと落けて

按ふ久米ゝ仙人婦女の白泡脛を出ゝ河水ゝ物洗ふ云ゝ

見て通ゝ失い天上ゝ落ゝ今俗のオツコチゝ類

小ゝあゝんゝとゝゝゝ思ふゝ

因云　元亨釋書曰久米仙人者和州上郡人入深山學仙法

食松葉服薜茯一旦騰空過故里會婦人以足踏洗衣其脛

甚急生深心即時墜落　徒然草今昔物語ふどふも久米

ゝ仙人の事見えゝる

遊女　古昔其風ゝ有ゝ古今の白女後撰ゝ檜垣後捨遺

宮本詞花集新古今ゝ玉葉の初君江口の觀音中君小

女蟹江ゝ宮城三牧如意香炉孔雀神崎ふ宮子小兒河菰姫

刀命拍犬大磯ゝ虎御前粧坂ゝ少將手越ゝ緑前黄瀬川ふ

羽子蒲原ふ竹取吹上翁泉州に乳守又清盛の愛妾祇王

祇女義經妾静或近江ゝ吉原ゝ高尾勝山采女等其他枚挙

すゝゝゝ暇ゝゝゝゝ

輶軒小録云清盛ゟ竈帽妓王ハ江州益須郡中北村ゟ産し其
村灌漑利ゆる因て其上竈ゟ時分清盛ゟ請て堰を堀
て水掛りの便をもす其堰今ふ残りて益須川流決して三
里許ゟ閉水を取二三村の潤ひとなる一日ゟ閉ゟ成就す
と言傳ふ田地へ取餘りを湖水へ落ゟ寺ゟ妓王ゟ
追善ゟ所ゟ老老ハ人ゟ妓王ゟ忌日ゟ精進す
ゟふ木村伯倫生其邑人ゟ詳ふゟ

祇王

りえ出ゟ拙ゟ同し野辺ゟ草何ゟ秋ゟあゟ果へ哀
萬治年間の名妓高尾（吉原三浦屋四郎左衛門ゟ抱し三番目）下野国鹽釜村（江戸ゟ去ル四十ゟ里ふゟ）ゟ産し父を長助と云其子孫今ゟ行りゟ高尾ふ
初代より十一代まで十一人有と云浅草今土橋西方寺（浄土宗）

又三谷春慶院ゟ墓有何ゟも法名辞世ゟ同じけゟども
年月等ハ同じゟ法名傳響妙心
昔より遊女ゟ老ゟまゟ眉を描ふや
ゟゟゟゟかく眉墨ゟ徒り心ゟそくゟ老ゟる
つゟゟ眉つゟる支ハ秦の宮中ゟ始ゟ八字ゟ眉ハ漢文帝
ゟ時ゟ起ゟ夫ゟ青黛愁眉啼粧等のつゟり行ハ迚支事
物紀原等ふ見えハゟ頼朝卿の時志水冠者（一ゟ里見冠者義成）を遊
女別當ゟゟゟ由東鑑ふのゟ新田義貞越前國金崎ゟ
城ゟ籠りゟ時嶋寺の袖と云遊女ゟ舟ゟのせて上宮の沖
ゟゟゟ休太平記ゟ記ゟゟ如し傾城と号するの
ゟゟゟ後の事と見えゟり（南領子）
浦冠者範頼播磨國高砂ゟ逗留有て遊君を召集ゟ

酒宴に及ぶ此度後世に見てかたるべき事なれ
限りとなるべしさるにて其頃ゆかしく富士
野御狩に工藤左衛門祐經が木瀬川の亀菊と云る遊
君を狩場の小屋に呼入て樂みたりしに又源義朝の子
九郎大夫中一男惡源太義平は四男義門は橋本の遊女に腹
に生る蒲範頼は母を遠州池田の遊女又右大將頼朝卿
上洛しあひ橋に宿し遊女數多集たる是等に多くの贈
物賜はりしとぞ

橋本の君に八何を渡すべきこの句をのみ詠ずべ

梶原景時が

そもそも川のなかれとはやらぬ申しに

柳白拍子を鳥羽院の御宇永久三年嶋千歳若前と云る二
人の美女ありて舞樂に長じ頻伽の音色花の形容
るに烏帽子に水干袴を著し木刀を佩として朗詠集の詩歌
或何とてかくも興ある事ぞ抑よりの思いの節を
けみ謡い舞に其時よりぞ始る敏太敏等の囃しものも所作舞
このもしぐ云ふ白拍子と名付るも謂ひ後世に
敏太敏笛等しらべ調ぶりうたふ伐素謡と云ふ如し素
白きを云意にて素鑑素鑑と云ふ如し此類に所作
其後樣妓王妓女佛礒禪師なんどの白拍子ども世よりて
をやうして今樣と云ふを調ぶ出せりとぞ後鳥羽院今樣
を種く面白く御製作有りて亀菊に教へまゐらせ妓
王佛が後に加賀の静十才穂と云る二人の白拍子出て天下に
其名伐あらはせり 北条々平記

昔管仲齊を治し紀女閭を為て戸凡七百と云女閭とは淫
婦其夜合れ資財欲し軍国の佐とせしを五雑組等み見
ゆ嗚呼管子ハ已八れ家主れ如くうり上女を集メて衒賣
し其利を射けるふや唐宋又官伎ハ女色を市し民と
利を争ひしふ似くと其家み居て設淫生活する者我土岐
といふ私窠子と呼せるもん明朝れ時南北二の教坊官娼
妓の税を収免是を脂粉銭と称す郡縣み隷する処のもの
ハ樂戸と名付て使令み聽せしさるハ其大都會れ地毎
み遊女子千百戸以て計ふべし窮郷僻邑といへども亦
所もあるり毒又明れ末ふ多く見えり 隨尾張人 天野信景
あり姫れ神代ハ記つくけふの日を集へ遊へひつきみ
せん

萬葉集ハ小見えし遊女士師ハ哥心大伴家持田辺れ
福丸れ歌ハ歌ハ遊女ハ遊女の浦を
仙覚抄ハ越中国とハ家持越中国へ任国と云時を
哥ハ歌の中ハ海人ハ海人帝ハ海人
みの記ハ心ハ遊ぶ此事を長く語ハ
ぐべし祝ひてハ歌ハ昔れ遊女ハ大内へも
出雲の上ハ古書ハ見えり 京山

遊女 白女

命ぐハ心みハ海のふハ何の別とハ
是ハ源實ハ施紫へ下ると山寺ハ別を惜ハ
ハ

萬葉
遊女 珊瑚

あだなを誰とかはいふのつゆ時しも定めぬ世を定めぬ場

同　大橋

こゝ所なれどみるえもつゝ紀伊国屋川竹の里にあくがれ出

遊女九重

遊てし遠紀東ふすみ川ふる西流をいつるくるるも

江戸新吉原の妓女九重の和歌　上聞に達し奉公御免

江戸町二丁目西田屋又左衛門へ預けらる此九重八京

の生出にして代官の妾となり江戸に来る跡有て代

官遠嶋をうけ故新吉原に至り九重といふ

遊女粧

さやうの名月の陰とこゝ紀伊の名人待よりの心とり別

夕されば身をうらみの女郎花枕さだめぬ風やなびく

遊女住江

霄ぞはの置露ゆゑとて朝毎に消ぬる此身と今を知るゆゑ

遊女瀬川

傾城のうゑ、言葉は花紅葉ゆゑの竜田は昔ゆゑにて

物梁

傾城は実ゆゑにも傾ふらつく客やいくばく先けん

或傾城ゆゑし五常有とて戯よりくれをけれ

仁さうりを脱て遣す　義切びを　礼大門まで送る　智かいを呼ぶ

信異見してへすて

江戸三田三角局女

ちと塚のちりも交ぐ松出し声白ふしきものとこそ

さて衣今宵は誰か契らん我つゆ形て袖に重ねて　江戸本所辻君

戯歌　戯句

一斗二斗四斗を遣　蜀山人

釣針は地獄へ兼て知らるるの末ふかくもいとい

ふいくさを玉子は君を立するの命などりは社さけ

茄子さへ早さの頃々色付くくそさるを油つまるり

世の中はえて女は多くを男は心弱くはかりまり

結しもあつとてそもの一夜ゆ邪　谷妓　高尾

薄雲

領中鹿嶽ハ肥前国三根郡濱崎の南に在

大伴佐提彦ゴ妻松浦佐用姫此山ニ登リ

領中を脱て其丈の高麗ゆ使すと雖

しと備姫の夏国

史經籍ゆ見えずし

いへども古今云傳へ

いふ云葉集巻五

ゆ上憶良松浦の

歌三首領中鹿嶽

を詠ずし所一首進

加の歌四首三嶋嶋

し歌一首すて名首

備姫の恩と詠ず

初ものとやらとかおくるの一ッ夜着　風船

両面は帯と以ふ題ゆ

ゆるこれは白いしとけつて閨を月

五条入道

恋せずい人の心をあつ迷りの袂ゆ涙ゆ

閑院宮

ゆしもちしと寒ゆ恋をくらふ迷ハ耶ゆ

清少納言の枕草子云遠くて近きものゆ男女の中

長保年中禅定大相国又上東門院御幸ゆ時宇治大相国の

遊御賞愛の事見えり古ゆ風流千章ゆ

のゝ

兼好法師ゆつゆ草ゆ色好まぬ人ゆ玉の盃ゆ

国立公文書館
National Archives of Japan

きぬぎぬ　如一云云

仲實

今昔百首

くらべてたゆめ所ハ真くもれるの残戀ゆ解るゝ身
れいろふせん

古今

すまいもる田子の浦波うちぬれて日ハ暮れども君戀ぬ日ハ
形

頼政家集

人ちゝ恋うつまさるれみ祈りうん恋ゆ病も止ちゝ立ゑやハ

伊達宗利女

人ちゝハ浮名やうん小夜更て我ゝ通ふ梅ゝ

独寝別

小夜更て閨ゆ燈きえぬ道ハ我ゝ心社つれぬるゝ

九州大内左京太夫義隆女　貞子

身戒ゆ人ゆ知ぬ戀ゆ戀ハ恋ゝ

橋州室津遊女

花ゝ見ぬ人ゆ知ぬ戒身ゝ室ゝ何ハ

疑戀

色見ぬ人ゆ心ゝ花ゝ

清水濱臣

和歌三神

住吉　玉津嶋女　人麻呂

六歌仙　古今集

僧正遍正　在原業平　文屋康秀　喜撰法師

小野小町女　大伴黒主

百人一首ゆ内婦人二十一人見ゆ

七福神　壽老人　恵比須　大黒　布袋　辯財天女　毘沙門

按ずるに和歌三神　六歌仙　七福神共に一婦人にて

わきもこ　女れ想各〻　吾妹子　脇母子とも書く

我児子　吾脊子

我せこいう衣を風もち降毎ふ野辺にみとりに色勝れる

人麻呂

わきもこが結ぶ髪をもつ澤の池に玉藻とみるに恋しき

我せこいう衣を貫すに成吹くに琴引池秋の初うを

讀人しらず

ぬく皆れ童のるさてに重ねぬ思ふ折れに卯今ハ行ぬ

ゆりも宮守とも蚕蜘蛛とも書て女出こさくもるとも云

さるゆりの血を女ふ陰陽のもるもさすると女

姙産せるに祥を付さる血落ざるこ法花ふしゆりの血

戒取て婦人れ汚ちよめりはば私の心にこれを洗

へどしゆちびと必ず是みてりて宮守と名付り宮

々宮女れ居所守をゆりこ

鬼さりく　心みくこと云ふ狂鬼と云字をにくし

とも鬼の又女をもて鬼とも云　兼盛

みちのくに安達ふ原れ黒塚鬼ありと云ふ也ふ

此歌々陸奥安達郡黒塚と云所に重の妹にりしよおい

りしこ　鬼れすぐく女れ多く集りあるを云

むくくとて荒いる宿れいぶもいかりおも鬼のすくく

・さつ草　はつ艸とも何ともわかき女郎のふく源氏ふ
紫の上のわかふを見て光君よみ給ひ哥よ
手ふつけていはすもみん紫のねよりひけるのゝの若草
・さくはう　うふひ　みそ免　あげまき　そく免皆い
おぶ嫁をぞくゼツ女をいふ
・和俗懐妊の女腹帯する事ハ五ヶ月成以てよる中世ゟ五ヶ月ゟ
限らざるか足利直義室園大暦ゟ貞和三年二月九日成
一点御着帯今月七ヶ月と云云
・手子崎神社　東下の羽崎村ゟ在旧記ゟ神遊社ゟ云
ゟ由見えて古ハ太神の御娘と云傳ふ按ゟ上代香嶋郡童
女の松原ゟ則羽崎神の郎女神の嬢子と云ありてこゝゟみ
ちもすびのりけるゝ隙ゟ松樹と化て余美松古津安と云

故事風土記ゟ見ゆるとハ此童女ゟ祭ゟ社ゟ彫ざる
故手子名今ハ下総共間村ゟ手子の社ゟ又埴科の石井手兒又さとりの
手兒崎ハ此ゟ成ゟ海辺ゟ成ハ手兒の住ゟ由りてさ
ハいふゝん云云
・武蔵国栗原ゟ西方入度四五町高押村の内松永と云所
ゟ杉木有昔ゟて此杉を静の塚と云傳ふ近頃中川君
ゟ建ゟ碑有静女墓と記す静墓ゟ所ゟ
江戸ゟ十六里と云
夫木集ゟ傀儡をゝゝいと訓ず　定家
・一夜ゟ野上ゟ里の草枕もすゝゝる人の契成　季経
うゝ女ゟうゝゝゝあるく旅姿住ゟ成りの上ゟ有ける

わすれ草我下ひもに付たれハ鬼のしこ草ことにし有けり

鬼志許草とも鬼醜草とも書紫苑也

右の歌ハ万葉集四に家持が坂上の家太嬢(イラツメ)に贈る哥也離
絶数年後會相聞往来歌とあり いふこゝろハ久
しき女にあひて昔をわすれぬ哥とかや歌の心ハわ
すれんとすれども忘られざりしと云也 鬼のしこ草ハわ
すれ草をいやしみて草なれハ顕昭ハふるく人なるへてみ
へからざる草也といへり

菅家

梅花色にも似あらぬあやしの色にもつくへかりけり

莵名負(ウナヒ)處女(ヲトメ)奥槨(ツカ・オキツキ) 奥槨ハおきつきとよむ也日本紀にハおきつき
と訓たりうなゐ處女の事ハ大和物語(花山院の作とかや)にもあり又万葉

集九巻に田辺福丸が長歌みやおみさけり其反歌有
古のさゝをとこの妻とひしうなゐ處女のおきつきぞ是
此哥ハ昔津国芦屋の里にうなゐをとめと云女ありそれ
をちぬの壮士(ヲトコ)いどみ争ひけれハ男の名を一人(一人を茅渟男といひ)一人をハうなひ
男と云けれハ男の心ざし何れも劣らざれハ女思ひ
わづらひて親にいとまごひして遂に自害してうせぬ其
時二人の男も同じく自殺しけれハ其所の人哀をたく
ひらして女の塚をハ中につきて二人の男の塚を相向ハ
せてつきあらはせるなりをとめのおきつきとも以下なきつ
かとな塚の名也 奥槨とハ棺槨に入るあらく埋しけるにや
同じ九の巻にも長歌あり

處女塚都名所圖會云大日堂山城国の南 浄禪寺の門前に在

由縁ハ前編下鳥羽恋塚寺の所ふ委〻因茲ハ〻ハ略す傍
ふ林道春の撰する所ハ碑碣を立ハ其序銘曰
鳥羽戀塚者文覺為源渡妻所築也初藤盛遠既彼婦而無道
劫婦之母為媒徑母呼而告之婦念不聽則殺之不孝聽棄夫
不義噫不孝不義我生不如死欲以身當之乃佯諾曰請失我
夫而後可以從也一夕在閨新沐而卧者即是矣我開戸待之
盛遠約去婦還設酒與源渡相献酬使卧於與婦自沐卧閨夜
闌盛遠果到断頭持荼毘朝視之則婦之首也盛遠甚哀即為
僧所謂文覺是也其後在高雄遥望埋婦之處名曰戀塚世俗
所傳蓋如此嗚呼婦孝于母義于夫節其身雖丈夫不過此也
長安木昌里之節女同日之談于秦之懷情臺以貨沮之漂母
墓以恩胡地之青塚以怨何足比之哉曹娥之孝漂水女之貞

其碑其名古今不泐此婦之名亦然于彼之戀之在色耶在節
不可不擇也浮屠之有塔銘猶如碑碣也
銘曰
吁節婦兮　惟孝惟義　石可泯兮　貞名不已
正保四年十一月二十九日　羅山子撰
願主　永井日向守直清

浅野家ハ義臣身ハ隠ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ時其内ハ何某とうやゝ人
京ハ〻ハ或遊女とりの〻ふ夏あるハ〻ハ〻ハ事極りて東ふ下り
ハ〻ハ〻ハ〻ハ女ハ〻ハ〻ハ
戀〻ふ〻ハ我後ハ也ハ問てハ〻ハ迷ふを先てハ〻ハ〻ハ
ハ〻ハ〻ハ〻ハ是を限ハ〻ハ命とハ〻ハ別ハ〻ハ今朝の手枕

等閑なる心を男も妻も覺えて最後の人に語りしとこ
や男死ぬ賜りて後尼になりて西郷なる所に堅固に念佛
して行ひしを見し人語り侍る

顔子推家訓曰凡庸之性後夫多竈前夫之孤後妻必虐前妻
之子

又曰婦人之性竈子胥而虐兒婦云云 和漢古今同じさかや
噫呼

嫡母 父の妻ふれとも子を生ずして 養母 已ぶ幼より外の家に養育せらるるをいふ
慈母 生所の母先に父則妾をして養育せしめしこと 嫁母 家所生の母なれども父先の後他へ嫁しゝるものゝ
出母 うまれ実母なれとも父に是を出しゝるものゝ 庶母 我実母にあらざれども父の妾つぎ兄弟を生ぜしもの
母所生の母に代り乳哺せしものゝ 親母 我を生ずしゝる實の母

以上是ぬ九母といふ此内我を生ぜし偕老なるものを親母

姫瓜 枕草子にうつくしきものの中に瓜に書きつる紀子が顔

金瓜 青瓜 江戸にてくハ本田瓜と云

韓瓜 阿古陀瓜 淚瓜 布瓜一名糸瓜

南瓜 時珍云種出南蛮江戸にてカボチャと云

冬瓜 冬瓜 冬国にて冬トウクワと云

越瓜

と云く親母ぬのけめるるに紀に八母こ是皆恩有故に西土
にて是を爲に服有嫡母已下慈母に至て皆三年の服こ
嫁母出母乳母に一年乳母に三月に服有我國に八乳母に服ふ
し

三子産 生國奥州會津産今年七歳丈夫誇鶴松亀松又竹
松而面躰如割瓜 天保七丙申年五月江戸浅草觀音寺内
念佛堂にて虚空菩薩に開帳有此時三人來る
日本書紀云略上亦進相模欲往上総望海高言曰是小海耳可
立跳渡乃至于海中暴風忽起王船漂蕩而不可渡時有從王
之妾曰弟橘姫穂積氏忍山宿禰之女也啓王曰今風起必王
欲没是必海神心也願以妾之身贖王之命而入海言訖乃披
瀾入之暴風即止舟得着岸故時人号其海曰馳水又作走水云云

社記云上略　其後弟橘媛の御裳此辺の海上に浮しけれバ尊御群臣に命じて此所に收め擅を築して瑞籬を巡らして御廟と称し給ふ　尊體の寄りたる地に御廟を築奉るに上總國君不去の吾妻明神是也又御櫛のよりけるを取上て御陵を造る今の相州梅津の吾妻明神にして當社古ハ荒陵なりしを承久元年北条泰時の幕下鈴木隼人正神尾釆女井出大学等の諸士小祠を創営し神領三百石を附しなりしと云其後永禄の頃小田原北条家の臣遠山丹波守當社を再興せしと云　江戸名所圖會

白氏文集曰合者離之始樂者憂所伏

佛書云會者定離

いつのまに年月のたちて思ふらん逢みし一夜の今朝のわかるを　家隆

文選古詩曰去者日以疎生者以親　去とる死者之生とる迄

あるかあるへ人に

泉州堺の遊女地獄を一休とぶらひ逢て

聞しより見ておそろしき地獄かな

じいはせしうバ

いうかなるもの落ざらめやハ

と地獄付らや

新古今に天王寺へ参り侍りけるに俄に雨降りけれバ江口に宿をかりけるにかし侍らざりけれバ　西行法師

世の中を以とふ迄社かたからめかりの宿りを惜む君かな　遊女妙

返し
世をいとふ人とし聞はかりの宿に心とむなと思ふはかりそ

年にある傾城にもつ話　縁談の中人　晩に来ると云朝帰り
尼に成られしと云娘　はれなしと云茶屋女　物日前の
女郎の彫物

傀儡は木偶人を以て人の業をする事なるに此中世に云傀儡
を旅舎の遊女を云夫木集傀儡をクヾツと訓一夜かす野
上の里の草枕結ひ捨る人の契を　定家　うかれ女なからと
ていにく旅姿すみつかれいき物にそ有ける　季経　穢哥多し
青墓里大井川等之或云古なかりし女木偶の藝有し江口
神崎なと遊ひとのかりし所之今西宮の傀儡師とて猿楽
の謡に人形を舞すれと今し是江口の遺風と云さる事
も侍るにや

朝妻船の賛　　橘千蔭
一夜かりの浮名の路の朝妻山は悔かしぬ人の
契なる名さへかし床の嵐に袖ぬらしかみの柳かけつなき
うかれ舟のうたかたのよふつゆのゆくへたいさや川いさ忘
ら波もおきてそへてうつやつてそのかりしなや

蜀山人
みつまいの邉に北里のかり宅かりし時書て遣はし侍
身なれとも思ひをぬくしけに遍よくいにぬ流に子よすともうかな
かいれとけて結んで結んでとけてぬるもかくいかない
ア杭うかいをぬいぬ下女のあかつき頃名廻しなひるな
くやならすのほくさに

醜女の賛

外面河豚（フグ）の如くふくれでしいまぐいするぞんぜん人よふるまい
ず内心菩薩の如き形しどもをゞもとしてくゞくゝ（ふ）
ほゝゑまいあそふもとは是や其此身ふ自然備ゝる福

今戸焼の姉さんの賛

人のうはさしいるず　こゞ自慢も解ず　酒しのあず
飯しくハず　ほゝゑ支しまるもとバなるそもつゝび
さゞ形色色いうへゝるまへのうるゝけ　誰やゝ
ゝてめいあでゆもし娘ふめゞん好ゝぶゝ九重ゑ結ふ腰
帯

錦木　奥ゑ國の男ゑ女ふとのいしまるふゑ文茂ゆゝ支
ふく一尺ばうゆゝる木をゆゞゝゑ色ゞりて其女の門ふ
立ゝバ女逢んゝ思ふとゝきハ取入ゝゝ又ゝゝゞと思へバ

ゑゝゝ千束の數茂つりゝとゞも取入ゝゝゑこ故ゑ千束ゑ好
りて打ゝゝをよゝ重又袖中抄ゑいの木を錦木といふ

神代巻　素戔烏尊御歌

八雲起出雲しやへ八重垣つくる時ハ書隱ぞ古支記ゑ八重垣
造其ぞ重垣平うゝ茂

八千承神の御歌

やちほ八千尋ハいの神自合なのみ命とい者八洲国妻やしまぐゝつゝゑ
うゑ不得てとほ遠ぐゝしさ越いの國ゑさ賢絵ゝ茂ゝ有りゝ開きゝ立
てくゝしめを麗ありとき岡てゝ雅記結ハいよ往立ゝ結婚
ばひよあ往来ゝゝ茂ゝ力つゝ緒ゝ木おゝ
ぶ解ぶ而ぶ仲帯ゝ末ゝゝ解ゝゝ板

（ミノ見とふ説ハ取ず）

幼名狭野又名日本磐余彦尊母玉依姫生而明達年十五立為太子後娶日向國吾田邑吾平津媛生二子云云下略
百草露二ノ巻ニ詳也

どをおそぶらひわがたゝせればひこづらひわがたゝせれど
せればあほやまにぬえはなきぬさぬつどりきゞしはとよむ
よむにはつどりかけはなくうれたくも鳴なる鳥か
の鳥もうちやめこせねいしたふやあまはせつかひ
ことのかたりごともこをば

神武天皇の御製 人の代と成て三十一字の始也

あしはらのしけしきをやのすがたゝみいやさやしきて
わがふたりねし

右此ハ伊須気余理姫ハ狭井河大和国城上郡の家ふ行幸しぬ
て一宿御寐まして後ふ余理姫入内そ給ひける時よみ
せたまへる しけしきは繁之 いやさやは弥清之 芦原
のしけしきをやほとりの小屋ハ上古自質素の体さし侍
るべし余理姫を事代主命の御むすめ神武帝の嫡后ふ
して綏靖天皇の御母君也此御製ハ落句より皇統萬々
世ニ傳はりて日本の光普く照らせ給へバ此狭井河の
河波を彼出雲八重垣ニ備ふさあまりて五道歌林ふ崇
むべき御製ふなるべし

内閣文庫
帝國圖書之印

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan